

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370148

研究課題名(和文) 平安仏画の技法に関する画像情報による調査研究

研究課題名(英文) Reseach of Budhist Paintings of Heian Pereiod by High Resolutin Disital Image

研究代表者

小林 達朗 (KOBAYASHI, TATSURO)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・日本東洋美術史研究室長

研究者番号：10342940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本の平安後期の仏画は、微妙に変化する彩色と、金銀箔を極く細く切った截金により、独特の美しさを作り上げた。本研究は、高精細デジタル画像による調査によって、この技法と表出性の関係を探ろうとしたものである。対象は東京国立博物館蔵・国宝千手観音像、同・国宝普賢菩薩像および同・孔雀明王についておこなった結果、当初の予想に反して、截金は仕上げに行うものではなく、截金上にも彩色があり、截金のもたらしかねない平面性への周到な意識があったものであろうこと、上から塗られていると思われた照量が最初に施されていること等これまでの定見に反する技法などがあきらかになり、目視をこえた技法と繊細な表現が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Japanese buddhist paintings of later Heian period made unique and high level beauty by colors that subtle changes and very sin gold or silver leaf.This rsearch is to inquire the relation of this detailed technology and its expression by high resolution digital image.This time the objects are Senju-Kanon(Skt:Sahasrabhuja, National tresure, Tokyo Natioal Museum) and Fugen Bosatsu(Skt:Samantabhadra,the same),and Kujaku-myoo(Skt:Mahamayuri,tthe same) Consequently,contraly to expectation,,Kirikane(cut gold or silver leaf)is not atatched as an end, but there are paints on Kirikane. This is supposed that there were awereness of flatness that Kirikane will may makes.On the other hand,the Teriguma(High lite) that was supposed to paint on top of coloring was painted first stage that is supposed to be looked without any darkness. Others, some minute technique wich are difficult to look were recognized.

研究分野：美術史

キーワード：平安仏画 普賢菩薩像 千手観音像 孔雀明王像 截金 彩色

1. 研究開始当初の背景

日本において、平安時代後期 12 世紀に、微妙で多彩な色彩の変化と、金銀を細く切った截金による日本美術史上重要な仏画が描かれた。しかしこれらはその技法が微細な故、図版や展覧の目視では、その細部を捉えることは不可能であり、このような視点に立って技法と表出性の関係、また美術史上の位置を研究されることは多かつたとはいえ、またこれに対する検証も非常に困難であった。

2. 研究の目的

本研究はこの問題に対して、すでに述べられている事例も含め、その細部の技法をつぶさに検証し、技法と美しい表出性の関係を検討し、また日本美術史上におけるその位置づけを行うことを目的とした。

3. 研究の方法

東京国立博物館の所蔵する国宝の平安仏画、千手観音像(12世紀)、普賢菩薩像(同)、および孔雀明王像(同)について、当館研究者とも連携し、東京文化財研究所の持つ、高精細デジタル画像の技術を用いて、肉眼を超える細部の技法を画像により取得し、これをつぶさに検討、考察した。

4. 研究成果

(1) 千手観音像においては、截金に金箔と銀箔を合わせた合わせ箔と金箔だけの部分が見られた。(図1)本来は金色に見える箔だけだったと思われるが、合わせ箔はより薄い独特の色合いの微妙な違いがあり、箔色が一様になり、平面性が強調されないような配慮がなされていたと思われる。合わせ箔はより切り出しやすいように作られたとの説もあったが、ここでは混在していることから、合わせ箔の使用はより表現性に配慮したものと考えられる。



図1 千手観音像光背の合わせ箔の様相

(2) 千手観音像の一部には、金箔の上に暗色をかけた部分があり、箔上に絵具の載せるといまままでの定見に反することがみられた(図2)。従来、金銀箔というものは、物質性が強く、平面的な表現しかできないため、絵具とは相性が悪く、これをあえてしたことによって、12世紀の仏画は「平面的」で

あると評されてきたが、そのようにならないための配慮、すなわち、箔にもグラデュエーションをつくることになされていたと考えられ、従来の評とは異なるものと考えざるを得ない。



図2 千手観音像の裳先端

(3) 普賢菩薩像においても合わせ箔の使用が見られるが、千手観音像よりも少ない。また一部ではあるが、截金上への彩色がみられる。さらに、金箔であらわされた、象の杏葉は絵絹の裏から貼られたいわゆる裏箔とする見解が主流であったが、高精細画像を検討した結果、金箔は表からなされたものであることが判明した。箔は絹の繊維一本一本からみつくようになされており、これは平面性、物質性が生じないようにする配慮と考えられる。さらに杏葉の上には赤、青、緑の彩色が乗せられていることが明らかになった(図3)。



図3 普賢菩薩像象の杏葉の箔と彩色

(4) 普賢の化身である三化人を観察すると、截金が三化人を描く前段階で施され、その上からこれが描かれていることが判明した(図4)。截金は最後の仕上げとして施されるものという予見に反するもので、截金が彩色で描かれる課程の途中でなされているものであることが判明したことは、成果と考える。

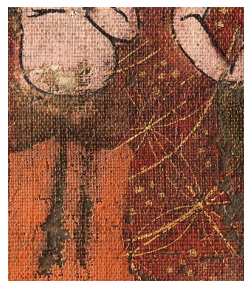


図4 三化人部分 彩色の下に截金がある

(5) 普賢菩薩の裳の照量(ハイライト)は、「照量を施す」という言質が従来使用されてきたため、描く過程の最後に描かれるような予見があったが、精査の結果、これまでの高精細画像の調査の結果、知ることのできていた「虚空蔵菩薩像」(国宝・東京国立博物館蔵)をはじめ、千手観音像、普賢菩薩像においても始めの段階で施されていることが判明した。下地に他の色が施された上に白を描いても、美しい白にならないことが要因として考えられる(図5)。

ただし、孔雀明王像については、また別の手法が使われている。



図5 普賢菩薩像の照量 赤字との境の下に、照量の白が塗られていることがわかる。(6) 孔雀明王像については、合わせ箔がみられず、金の截金のみの使用であることがわかった。しかしながら、そのことによってこの作品が平面的になった、とは言い切れない印象をもたせる。この作品においては、照量は先ではなく、筆の先端に白を、下に緑や赤をつけ、ぼかしながらえがいたものかとおもわれる。その上に金截金がほどこされているが、この場合、下地の色と截金との関係が重要である。明るい部分にほどこされた截金は下地に溶け込むようであり、濃い赤の部分などは引き立って見え、截金と色彩が調和して柔らかく見え、決して均等な截金だけが網を張ったようには見えない(図6)。このことは、普賢菩薩像の場合においても指摘できよう。この文様が下地との関係によってグラデュエーションを作って見えるということは、11世紀後半の作とみられる兵庫。一乗寺蔵・聖徳太子及天台高僧像のうち慧文像などにも指摘できる。この場合、截金は未だ使われず文様は均等な赤であるが、ここでもその赤の文様は下地との関係によってあるいは引き立ち、あるいは溶け込んで美しい変化を見せる。12世紀前半から中頃にかけての一連の截金を駆使した仏画のその截金の使用法は、前代の技法・表現と無縁ではないと考えられる。



図6 孔雀明王像裳の截金の見え方

(7) これら12世紀前半から中葉にかけて制作された平安仏画に対しては、「装飾的」という言質が行われてきたが、これに対して、増淵宗一氏は、「装飾」は近代の造語ではないかと指摘した。玉蟲敏子氏はこれをうけて幕末にその使用例があることも例示しつつ、近代以前の美術作品に対するその安易な使用について強い懸念を繰り返し示された。今回の研究にあたって調べたところ、「装飾」の語は仏典に古くからあったことが分かったが、その使用例は確かにきわめて少なく、これに対して「荘厳」という語がきわめて多く使われている。「荘厳」の用例をしらべると、いわゆる現在つかわれる「かざり」としての使用はもちろんのことであるが、宗教的・内的・抽象的なものを対象に込めることにも広く使用されていることがわかった。玉蟲氏の指摘されたとおり、「装飾的」という言葉は安易に使われるべきではない。「荘厳」という言葉の意義がもう一度問い直されるべきであると思われる。

(8) 以上、今回の研究は三点にしかおよんでいないが、あらためて認識させられたのは、合わせ箔の使い方、照り量その構造などには、それぞれに違いがあり、従来賞賛されてきた12世紀の「平安仏画」は必ずしもひとつくりにしては語られ、考えられないということである。同時代の作品に共通する特性を見出し、語ることも、美術史の重要な課題であるが、一方でまた、重要なのは、個々の作品の「差異」である。筆者もこれまで解説などをする際には、図像的な側面は「差異」説明することはできても、表現性、あるいは技法について、個々の特性、「差異」を語ることは困難であった。これは作品を肉眼もしくはそれを越える技術をもって、作品の構造技法を知ることがきわめて困難であったからである。そしてそのような技法の「差異」の部分にこそ、その作品の表出性にもつながる作品としてのいのちが宿っていることを知らされた。今後は対象をひろめるとともに、他の光学的調査も行った上で、その公開方法について検討してゆきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

小林 達朗 東京国立博物館蔵国宝・普賢菩薩像の表現および平安仏画における「莊嚴」、美術研究、査読無、416号 2015、pp.1-15

〔図書〕(計1件)

小林 達朗 他 平凡社、東京文化財研究所編、美しい術 国宝・千手観音像の場合、『「かたち」再考 開かれた語りのために』、2014、pp.143-156

6. 研究組織

(1)研究代表者

小林 達朗 (KOBAYASHI, Tatsuro)
東京文化財研究所・文化財情報資料部・
日本東洋美術史研究室長
研究者番号：10342940

(2)研究分担者

江村 知子 (EMURA, Tomoko)
東京文化財研究所・文化財情報資料部・
文化財アーカイブズ研究室長
研究者番号：20350382

城野 誠治 (SHIRONO, Seiji)
東京文化財研究所・文化財情報部・専門
職員
研究者番号；70470028